

# 吉川幸次郎の中国古典文学研究

長崎大学大学院生産科学研究科  
孟 偉

## 要旨

今日、日本の漢学については多くの研究成果が見られるが、吉川幸次郎に関する研究は極めて少ないのが実状である。実際にはいくつかの学術的な論著があるものの、それらは形式的、表面的な論述にとどまり、吉川の学問の中核まで深化するに至らなかったため、吉川の中国学の深奥にあるものを掘り出すことができていないのである。本論は、吉川幸次郎の中国古典文学研究、とりわけ、吉川の元雑劇研究と杜甫研究には如何なる特色があるか、彼の研究が日本ないし中国近代においてどのような位置を占めているか、彼の研究方法とは何かなどの諸問題について、吉川の学問の在り方と真髓を究明することで、日本における近代中国学についての研究の空白を埋めたい。

本論は、〈序章〉と〈吉川幸次郎の中国古典文学研究生涯〉〈吉川幸次郎の元雑劇研究〉〈吉川幸次郎の杜甫研究〉〈吉川幸次郎の学問体系とその意義〉の五章よりなる。

〈序章〉では、まず研究動機と研究目的を論じる。そして、先行研究をもとに、いかに展開するかを説明し、本論の内容と方向を定める。最後に、本論の研究方法を述べ、本研究の全体的な考えと筋道を立てる。

第一章では、吉川的生活背景、興味及び学習成長の過程と師友等の状況について探求し、吉川がどのように学問の基礎を固めていったかについて言及する。そうして吉川の中国学研究の生涯を把握した上で、彼が精神史の一環とする『元雑劇研究』から、文学の尊厳を追求する杜甫の研究へと一つの転換を果たしたことを論じ、その転換を手掛かりとして、吉川の『元雑劇研究』と杜甫の研究を繋ぐことで議論を展開する。

第二章では、まず元人の古典である元雑劇の姿を論ずる必要性について分析する。次に、中国と日本における元雑劇研究、主に中国の王国維、呉梅、日本の狩野直喜、青木正児、塩谷温らの研究を比較し、「科举」の廃止こそが元雑劇が隆盛を迎えた直接の原因であり、決定的であったのは元代の社会雰囲気転換や元人文学倫理の転換にあることを論証し、元雑劇を取り巻く諸問題の要因は、文学倫理の転換であったことを弁証する。そして、吉川がどのようにして言語により雑劇の文学的価値を分析し、元代の社会雰囲気という事実を通して元代の雑劇作者の愚直な心理や澁刺たる精神あるいは逞しさを究明することで、元代人の心を探求しようとしたかを考察する。これにより、社会雰囲気転換や文学倫理の転換というものこそが、元雑劇を前期と後期に分期する手掛かり

であることを指摘する。それらを踏まえた上で、最終的に吉川の『元雑劇研究』には継承性や開拓性があり、精神史研究の一環という斬新な研究体系をもつものであったことを論断する。

第三章では、まず吉川の文学史の研究が、精神史研究の一環である認識から文学の尊厳を追求する理念へと転換した原因を考察し、従来までの吉川の杜甫研究についての諸研究のありかたについて考察する。また、中国文学史が杜甫を境として前後異なる時期に分かれている原因を探り、杜詩における画期は、杜詩が中国文学史に存在する重大な意義であることを論証する。また、『杜甫詩注』において吉川が、杜詩を以て時代背景を解説し、歴史を正すとの宣言を用い、吉川にとって杜甫は古典であったとの認識に基づき、「詩史」がどのように詩としての役割を果たしたかについて言及する。そして、吉川が杜甫の言語運用と辞義の修飾を主軸としてどのように杜詩を解釈し、杜甫の深層心理について探求し、杜甫の心象風景を解説したかを論じる。吉川は「戯為六絶句」が杜甫の詩論であるという観点を指摘し、詩論が詩義であると定義し、「緻密と飛躍」が杜甫の詩論であるという主張を述べている。これにより、吉川が主張する文学の尊厳というものを明らかにする。最後に、吉川の杜甫研究を中国の錢謙益、仇兆鰲、日本の森槐南、鈴木虎雄らの杜甫研究と比較し、その継承関係と吉川の独創的な見解を論じ、吉川の杜甫研究の日中近代杜甫研究における位置付けを試みる。

終章では、まず本研究を回顧し、吉川が一貫して実践したことが、如何に考えたことを如何に言うか、言語と言語が表現する事実を通して著者の心理に踏み込む方法を抽出し、それは『読書の学』で理論化する「言、事、心」という方法であり、読書論を越える学問論であることを述べる。そして、言語は資料の媒介のみではなく、言語そのものが、精神生活の要素であり、言語を一字一字咀嚼、吟味し、言語や言語が表現する事実を人間研究の資料として緻密、正確に読めば、著者の「心」に飛躍することができる。中国の学が発明に在り、発見に在らずという体系を説き、吉川はこの方法を中国学問の伝統として、『読書の学』において、彼の中国古典文学研究において復権したいと論断する。最後に、この学問論が『元雑劇研究』と杜甫の研究においてどのように展開されたかについて論述する。

本論の結論として、吉川の中国古典文学研究は、言語や言語が表現する事実を見つめ、文学の外在形式を透過し文学の中核に入り、主体と客体とを融合する「境界」に達する人間研究だと言える。その研究成果は、それぞれの領域において画期的な位置を占め、その研究体系は以後の文学研究ないし漢学研究に強い影響を与えるという意義がある。